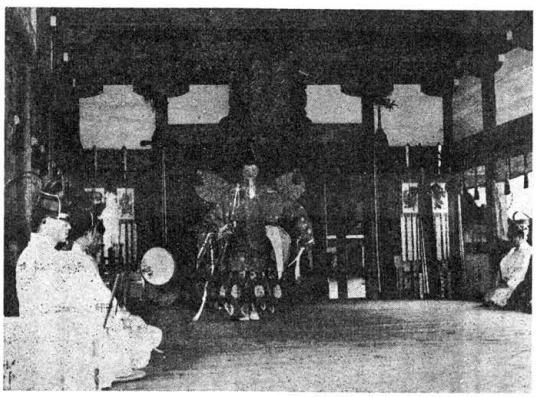
宗像

毎月一日発行
発行所　社会大衆宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
年定価一送料共 1000円

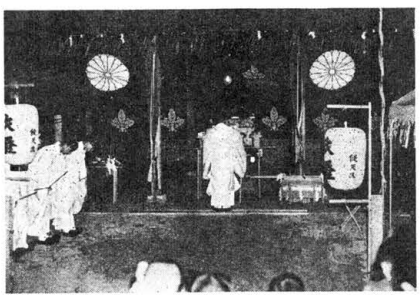
秋季大祭盛大に斎行

境内に雅楽の調べ流れ



三日間晴天に恵まれて
宗像放生会空前の賑い

宗像の田園に稲穂が黄金色に一色一押し立て、船出した一隻の漁船が付き始めた九月中旬の晴れた日、筑前大島から紺碧の海に、白地に一ノ島に鎮座する沖津宮の御神幸を国家鎮護の墨書を染め抜いた幟を迎えるために出航した御座船であった。宗像大社の神島、筑前沖



る。この船には宗像大社の宮司以下奉仕の神職と大島の氏子総代が同乗した。沖ノ島では昔ながらの海水禊を行い、厳粛な祭典を斎行沖津宮の御神璽を奉蔵して大島中津宮に帰社したのは、暮色濃い頃であった。

十月一日から三日までの当社秋季大祭が沖津宮、中津宮二宮の新しい神璽を迎えて三宮お揃いになられて斎行されるとの古い伝承によるためで、沖ノ島の神迎え神事は秋季大祭に先立つ重要な祭儀である。

九月三十日、辺津宮では早朝から高宮斎場に於て祭典が始められ午前十時半本殿から辺津宮の御神輿が出御された。御神輿は神湊街の入口から湊の人々の奉仕する寝台に奉安されて屯宮まで神幸し、屯宮に一夜奉安された。

十月一日、秋季大祭の幕は海上神幸から切っておとされた。早朝宗像六浦から漁船四百隻余りが大漁旗で満艦色に飾り立て、大島港に集結した。

中津宮では、沖津宮、中津宮二宮御神輿の出御祭が斎行され、この年最新の新造船の中から選定された御座船に奉安された。午前九時半轟然たる花火数十発を合図に先導船、御座船二隻、供奉船の順に四百隻余りが船隊を整え玄界洋上に乗り出した青竹に結ばれた紅白の吹流しが洋上に靡く、新聞社、テレビのヘリコプターが洋上高く低く舞って取材する。大島から地ノ島をかすめ、大きく迂回五月松原に沿って洋上二十五キロを約一時間で神幸、午前十時半過ぎに御座船二隻は神湊港に着岸、御神輿は鑵台に奉安されて屯宮にお誉めになった。

午前十一時、屯宮にお揃いになられた二宮の御前で屯宮祭が厳粛に斎行された。この後、雅楽の音を先頭に神湊の街中を渡御、神湊街はずれから自動車に奉安されて、辺津宮に入御された。

正午から秋季大祭第一日祭が始められ、地元青年団奉仕による風俗舞と地元各中学生に依る浦安舞が奉納された。一日が土曜日のため後からは参拝者が激増、正面参道は立錐の余地のない程人波で埋ってまった。境内には恒例の通り露店が立ち込め、昔ながらの放生会の賑いとなった。

翌二日早朝、伝統の流鏑馬が執り行われた。今年は騎手が若者に変った為か疾走する。矢が的に射られる度に参拝者から拍手が湧き上った。

午前十時から第二日祭を斎行、福岡雅楽会流能楽師の奉仕により鋭い笛の音にのって翁舞が奉納された。

境内特設場では、郡内六中学校対抗の相撲大会が開かれ、土俵を囲んだ観客から盛な声援と拍手が続いた。第二日祭は日曜と重ったため、駐車場は満杯。境内は物売りの声や、呼び込みの口上、参拝者の雑踏で空前の賑いを呈した。

三日も前日に引続き多くの参拝者があり晴天に恵まれて宗像放生会は終了した。古来田島放生会と呼ばれ宗像三円の祭りとして栄えてきたこの祭りは、交通機関の発達と共に、崇敬の輪を次々と拡大して、九州北部の大きな祭りとなってきている。

宗像の秋は、この放生会と共にやってくる。露店に並べられた柿や栗や生の落々しさに季節感がたてられる。

論説　瑞穂国の食糧危機

一部の古典研究者を除いて、瑞穂国は現代親しみのない古いわが国名である。豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみずほのくに）と古典は伝えているが、これを豊かに葦が茂って稲穂が房々と実る魚介穀類を十分に恵まれた国と解釈するなら、それは現実と祈りとを取り違えた誤りであろう。

豊かに葦辺の魚介が獲られ五穀の収穫が喜ばれる国土であって欲しい切実の願望を、国名に表現したのであって、その祈りは貧に現実とはならない。二月の祈年祭に始まる農事関係の祭儀は、豊作が飢饉かが国民の直接に被むる死活問題だけに、真剣な祈りであった。神意を頼む外ない原始農耕時代は、特にその祈りが政治の中心であった。国家的民族的の大行事でもあったのである。

日本だけではない。科学的知識の乏しい時代の衣食への願望は、それぞれの民族が有つ宗教に結ばれて純真な切実な祈りとなっていた。古代史の基督教・仏教・回教その他の民族宗教のいずれもその帆を一にしている。

豊かな食糧生産への祈りは、瑞穂国の唱名を生んでも、現実は姨捨山（うばすてやま）の悲劇的地名が語る不作飢饉は絶えなかったのである。神道的祈願だけでは解決されない食糧危機が、生きたままの老人を山中に捨てさせた。

八世紀初頭に制定された大宝律令の喪葬令では、一部の支配階級は別として、一般は墓を造ることを禁じていた。奈良時代の部族集団の慣習は、地獄谷と呼ばれる春日山の裏谷に捨てられたとされているが、不作飢饉の凶作に生きながらの地獄絵を彩ったのは、後代の信州野に限ったことではなかろう。いつの時代も共通した惨禍は、農作物を貢納する農民が最大の被害者であったことである。貴族や支配階級が食糧危機に泣いた記録は、どこの国にもない。

ここに取り上げる食糧危機の問題、瑞穂国の飢饉の歴史を掘り起そうとするものではない。現代の食糧生産の低下や供給不足の国策を考えてみたいのである。そして農業から工業国に転化してきたわが国の現状に関する対応策についての識者の意見を、特に戦争や情報の混乱、或いは完全な輸送手段が起す飢饉と栄養失調についての不安感を、検討追究してみたいのである。

今春、福岡のN新聞社国際ホールに於いて、シカゴ大学教授アール・ジョンソン博士を中心に、日本の専門学者や農業団体代表者・官庁の農政担当者等が集い「食糧危機の本質と日本の対応策」に重点をおく研究会が開催された。筆者も多数の参考者に交って、世界の農業経済学界の第一人者であるジョンソン教授の意見を聴いた。日本人協議者の意見も活溌なものがあって、極めて重要性を有つ農業問題を、為政者も国民ももっと真剣に研究すべきを痛感したのである。

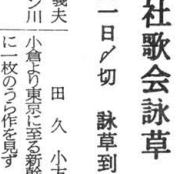
食糧問題は、今や先進国も開発途上国も一切を含めて、否、人類凡ての生存にかかわる重要課題となりつつある。生産国消費国ともに価格と供給の安定は、政治的にも貿易面にも繰せにできない重大関心事となっている。今後の日本にとっても当然大きな課題として取り上げられねばならない。

従って食糧の自国生産の検討が、穀物貿易に先立つ食糧問題の課題とされ、シンポジュームが強く要請されてきたのである。福岡に於いて関係者の研究協議会を開き、遠路シカゴ大学からジョンソン教授を招いたのも、食糧危機の本質を明解に分析検討した上で、今後の日本の食糧問題解決のための処方箋を得たいからである。

同教授は冒頭に「外国人が、いかに努力しても日本の大きな利益が何であるかを、正確に表すことができる筈がない。私がここで成し得ることは、今後数年間の世界の主要な食糧問題に関して、消費する食糧の部分を輸入に頼っている主要工業国の視点から検討を試みることに過ぎない」と述べている。既に日本は工業国に数えられており、祈りに出発して農耕を生業とした長い農業国の歴史は終えている。今や日本の食糧問題は、単に現在約六百万人に半減し、十年後には九十万人以下になろうと、専門筋を嘆かせている。輸入に依存する実情は、今後益々増大してゆくであろう。流通機構の操作には、考うべき多くの問題が絡む。（未完）

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市博多区東公園一丁三一（千八三）
電話福岡（九二）六五一一九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（千六三〇）
電話京都（〇五）三三一一三三四（代）〜四番
三三一一三三四・六〇六番

阿蘇少言



「立派な人間は出びないネ、それが当然だろうし、それでよいのだが」と放楽翁これから何を言い出すのか、冒頭この一発に味がある。ここは九重山の閑静な温泉旅館のロビー。ニュースが終ったところで、テレビを切る。谷川のせせらぎを聴く夜は、立派な人物を賞めるつもりか○地方の町村長や議員の醜事件は、新聞面に絶える時がない。だが、凡てがそうでなく、頑固なまでに清潔で、正直勤勉に節を貫く善良も稀に存在する。こんな人物は手腕家とか智慧者とも評されないが「立派な人間」はそこに居る○世間が噂するヤリ手に美人油断ならぬ奴物がありがち、まことに対照的だが、純物の方を愛護したい○殊に、国家社会のためにとか、正義のためにとか、大きな看板を掲げて、権勢を私利私欲の具にする輩、奸智は容易に尻ッポを出さない。それを歴史書の行間に書かれざる文字が教えてくれる○終戦直後、墓原泣取りの人矢の中に、元隊長がいた。黙々と働く姿は、亡き英魂をお祓いか、何も語らず。元隊長が営雑失調で路傍に行き倒れ。真の愛国者は不平も言わず銃同様に世を去った。正義感の強さが悲惨であった例は少くない○隠匿物資で肥えた実業人、法規の裏を巧みに泳いで栄達の政治屋、黒幕の謀略で勢威を揮んだ大物、いずれも亡国を喰った非日本人と思われる。今日の混乱、国情の危機、精神的には敗れた戦争は消えていない○これを好転し解決する者は、誇らない立派な人間やネクない平凡な人間であろう。教育はそんな人間を造ってほしい。「日本人はまだ生きている」と、或る外人の著述に反発したいものだ放楽翁は結ぶ。（一記）

第二三回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

福間　上野　義夫
瓦葺き流れる甍や天高しネオン川織なす秋の浮世の燈

名古屋　野崎　博三
秋ふかみ里に移るか生の列夕映えしるき山を降りゆく

宗像　驚津かつ代
月光は澄み極まりてコスモスの花のひとむら白く明るき

津屋崎　占部　由久
旅館のロビー。ニュースが終ったところで、テレビを切る。谷川のせせらぎを聴く夜は、立派な人物を賞めるつもりか○地方の町村長や議員の醜事件は、新聞面に絶える時がない。だが、凡てがそうでなく、頑固なまでに清潔で、正直勤勉に節を貫く善良も稀に存在する。こんな人物は手腕家とか智慧者とも評されないが「立派な人間」はそこに居る○世間が噂するヤリ手に美人油断ならぬ奴物がありがち、まことに対照的だが、純物の方を愛護したい○殊に、国家社会のためにとか、正義のためにとか、大きな看板を掲げて、権勢を私利私欲の具にする輩、奸智は容易に尻ッポを出さない。それを歴史書の行間に書かれざる文字が教えてくれる○終戦直後、墓原泣取りの人矢の中に、元隊長がいた。黙々と働く姿は、亡き英魂をお祓いか、何も語らず。元隊長が営雑失調で路傍に行き倒れ。真の愛国者は不平も言わず銃同様に世を去った。正義感の強さが悲惨であった例は少くない○隠匿物資で肥えた実業人、法規の裏を巧みに泳いで栄達の政治屋、黒幕の謀略で勢威を揮んだ大物、いずれも亡国を喰った非日本人と思われる。今日の混乱、国情の危機、精神的には敗れた戦争は消えていない○これを好転し解決する者は、誇らない立派な人間やネクない平凡な人間であろう。教育はそんな人間を造ってほしい。「日本人はまだ生きている」と、或る外人の著述に反発したいものだ放楽翁は結ぶ。（一記）

秋ふかみ里に移るか生の列夕映えしるき山を降りゆく

宗像　驚津かつ代
月光は澄み極まりてコスモスの花のひとむら白く明るき

津屋崎　占部　由久
旅館のロビー。ニュースが終ったところで、テレビを切る。谷川のせせらぎを聴く夜は、立派な人物を賞めるつもりか○地方の町村長や議員の醜事件は、新聞面に絶える時がない。だが、凡てがそうでなく、頑固なまでに清潔で、正直勤勉に節を貫く善良も稀に存在する。こんな人物は手腕家とか智慧者とも評されないが「立派な人間」はそこに居る○世間が噂するヤリ手に美人油断ならぬ奴物がありがち、まことに対照的だが、純物の方を愛護したい○殊に、国家社会のためにとか、正義のためにとか、大きな看板を掲げて、権勢を私利私欲の具にする輩、奸智は容易に尻ッポを出さない。それを歴史書の行間に書かれざる文字が教えてくれる○終戦直後、墓原泣取りの人矢の中に、元隊長がいた。黙々と働く姿は、亡き英魂をお祓いか、何も語らず。元隊長が営雑失調で路傍に行き倒れ。真の愛国者は不平も言わず銃同様に世を去った。正義感の強さが悲惨であった例は少くない○隠匿物資で肥えた実業人、法規の裏を巧みに泳いで栄達の政治屋、黒幕の謀略で勢威を揮んだ大物、いずれも亡国を喰った非日本人と思われる。今日の混乱、国情の危機、精神的には敗れた戦争は消えていない○これを好転し解決する者は、誇らない立派な人間やネクない平凡な人間であろう。教育はそんな人間を造ってほしい。「日本人はまだ生きている」と、或る外人の著述に反発したいものだ放楽翁は結ぶ。（一記）

明るく映えし十三夜の月まならにせめて明月なき今宵を過す　戸畑　田中ハツセ
美智子妃のお賞あげと小鹿入れしみやげの竹かご錦　自由ケ丘　吉田マツエ
曼珠沙華赤く咲く頃殊更に雑思ふなく人の恋しき　宗像　立花　勇雄
台風に追はれて来しかもめ鳥水没せし稲田の上を群れ飛ぶ　玄海　村田　四郎
酒辺にすなご遊びの海の子は大人のろかいも背のびして漕ぐ　宗像　天野トモエ
彼方此方に爪あと深く台風のすきたる後の青空哀し　宗像　今村　重刀
新婚の思ひ出遠き古時計動かぬままに今も残れり　宗像　立花　勇雄
台風に追はれて来しかもめ鳥水没せし稲田の上を群れ飛ぶ　玄海　村田　四郎
酒辺にすなご遊びの海の子は大人のろかいも背のびして漕ぐ　宗像　天野トモエ
彼方此方に爪あと深く台風のすきたる後の青空哀し　宗像　今村　重刀
新婚の思ひ出遠き古時計動かぬままに今も残れり　宗像　立花　勇雄
今朝見れば紅一輪葉の陰に芙蓉咲き初む秋つるかな　宗像　吉田　直志
紺碧に澄み渡りたる玄海の歴史に残る鐘崎の海女　福岡　桜井　ツ子
岡蘇平の冷たき水に影ゆれて植えしばかりの苗の蒼かげり　宗像　金丸　柳蔵
喜寿となり寿詞賜りぬ「君子萬年」を慶祝す」と書きありて　宗像　田中　春子
つまぐろに染めたる指をさしのべて老人ホームの友は栄ひぬ　福岡　江崎　琴子
撒水のしめりほどよき夕ぐれの庭のひとときわがものにする　玄海　中野　節子
抱かれて擽き初めをする幼児は黒染の衣に袈裟を重ねぬ　玄海　吉武　武雄
株刈り最後の鬼ごと出て兎も我もしばしためろう　宗像　立石ろせの
今はただ荒れるにまかせし土蔵の屋根家紋をうちしだ葺頃く　福岡　吉村　三郎
秋祭五百の舟は宗像の祈清めて沖の島ゆく　宗像　吉田　和子
君逝きし日も百日紅の白き花風に重たく揺れてゐたりし　田久　小方　実
小倉より東京に至る新幹線の左右に一枚のうら作を見ず　宗像　八波　五月
かび臭き部屋開け放ち窓に見る紫陽花は深き藍を湛ふる　福岡　吉田　信夫
大船が二つに割れし風の夜寝れがてにしてニュース聴きをり　津屋崎　麦野　時雄
六十年前の数え子尚窓きびしく叱りし思出の顔　宗像　片山　一
苞る胡麻は一粒の種子に一莢と百莢實るありて楽しも　福岡　広渡　一寸毛
集い合いて長寿を祝う敬老の佳き日に遭える老の喜び　武丸　原田まつ代
撒水のしめりほどよき夕ぐれの庭のひとときわがものにする　玄海　中野　節子
抱かれて擽き初めをする幼児は黒染の衣に袈裟を重ねぬ　玄海　吉武　武雄
株刈り最後の鬼ごと出て兎も我もしばしためろう　宗像　立石ろせの
今はただ荒れるにまかせし土蔵の屋根家紋をうちしだ葺頃く　福岡　吉村　三郎
秋祭五百の舟は宗像の祈清めて沖の島ゆく　宗像　吉田　和子
君逝きし日も百日紅の白き花風に重たく揺れてゐたりし　田久　小方　実
小倉より東京に至る新幹線の左右に一枚のうら作を見ず　宗像　八波　五月
かび臭き部屋開け放ち窓に見る紫陽花は深き藍を湛ふる　福岡　吉田　信夫
大船が二つに割れし風の夜寝れがてにしてニュース聴きをり　津屋崎　麦野　時雄
六十年前の数え子尚窓きびしく叱りし思出の顔　宗像　片山　一
苞る胡麻は一粒の種子に一莢と百莢實るありて楽しも　福岡　広渡　一寸毛
集い合いて長寿を祝う敬老の佳き日に遭える老の喜び　武丸　原田まつ代
今朝見れば紅一輪葉の陰に芙蓉咲き初む秋つるかな　宗像　吉田　直志
紺碧に澄み渡りたる玄海の歴史に残る鐘崎の海女　福岡　桜井　ツ子
岡蘇平の冷たき水に影ゆれて植えしばかりの苗の蒼かげり　宗像　金丸　柳蔵
喜寿となり寿詞賜りぬ「君子萬年」を慶祝す」と書きありて　宗像　田中　春子
つまぐろに染めたる指をさしのべて老人ホームの友は栄ひぬ　福岡　江崎　琴子

海の正倉院沖ノ島
磯釣り問題について
（その五）

この沖ノ島出漁船団の要望をうけた郡内六浦漁協組合長は、三月十六日当社会議室に於て「沖ノ島遊漁船対策協議会」を開催した。その結果

一、宗像郡内漁協のみでなく、沖ノ島海域で操業する関係漁協の全体協議会をもつ。

二、操業に支障が生じた際は、筑前海域調整委員会として更に対策を検討する。

一、暴力沙汰にならぬよう注意する。等を決議し、ただちにこの旨を出漁船団に通報した。また当社としても

一、再三に亘る警告にもかかわらず、これを無視する遊漁船にたいしては、確認書を添附し関係官庁に取締り方の依頼をする。

一、磯釣禁止の制札を小屋島、御門柱、天狗岩、くじら瀬、のり瀬に表示する。

一、小型船舶協会並名倉護沿岸モーターボート、マリーナに磯釣禁止の旨通告する。

ことにした。

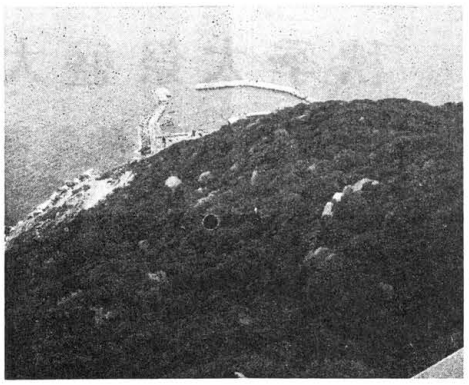
その後、四月の好漁期を迎えて来島する遊漁船はあとを絶たず、ために当庁では「宗海分発第一〇号」をもって五月一日宗像警察署長宛左記之書により取締り方の依頼を行った。

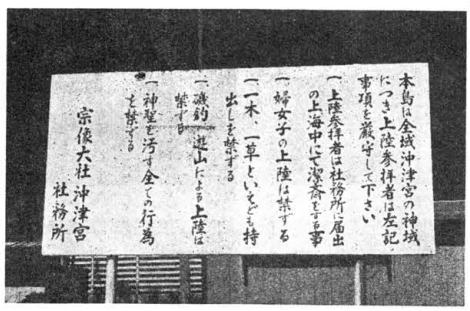
沖ノ島遊漁渡し及び磯釣遊山等による法上陸者に対する取締方依頼の件

一、前略つきましては、すでに各種報道機関にても報道されておりますように近年当神社所有の沖ノ島に不法来島者が急増し、各種の事故も多発しております。

そのため、筑前第十三号共同漁業権管理者を始め、筑前海区漁業調整委員会、文化庁、県並大島村教育委員会、福岡海上保安部、県漁港課等とも慎重に協議検討を重ねた結果、当神社と致しましては沖ノ島聖域護持、天然記念物、史蹟の保護、島嶼保護に万全を期するために標記による来島者は上陸を禁止するように決定し、福岡県釣団体協議会、各遊漁船、マリーナ等には上陸禁止の文書を出しております。

又、神社としては、上陸禁止の制札も立て違反遊漁船にはその都度現場に注意をなし、警告確認書をもとっておりますがこれ等警告を無視して不法に上陸集まった、各校選抜の選手は、決戦を控え各自まわりを締め柔軟体操、四股を行ない体調を整えるに余念がなく、大会開始をいまや遅しと待ちわびていた。





（上）山頂より避難港を見る
（下）上陸に関する制札

奉納相撲大会
盛大に行わる

秋季大祭第二日祭も厳粛裡に斎行され、境内は多くの参拝者で賑わった。

次いで、二日の午前十時より、神賑行事の一つ、奉納相撲大会が郡内中学五校百余名の出場選手の参加の下に行なわれた。

大会場は急斜の力のこもった取組に、会場を埋めつくした参拝者の心あたたまる、声援が湧き上がり、当日の大会は、近年にない盛り上がりをみせた。

当日昼前八時より相撲場付近に集まった、各校選抜の選手は、決戦を控え各自まわりを締め柔軟体操、四股を行ない体調を整えるに余念がなく、大会開始をいまや遅しと待ちわびていた。

午前十時開会式が執り行なわれ、真武弘之（中央田代大三（中央）両主将による選手宣誓、ついで、優勝旗の返還がなされ、いよいよ大会の幕は切って下された。

各選手の力のこもった好取組が続々と展開され、優勝旗の行方をめぐり手に汗を握る熱戦が繰り広げられ、終日大賑であった。

成績は次のとおり。

【団体戦】

一、三年生の部
一位　城山中学校
二位　津屋崎中学校
三位　玄海中学校
二年生の部
一位　福間中学校
二位　玄海中学校
三位　城山中学校

【個人戦】

一年生の部
一位　永島美信（津屋崎）
二位　石津章仁（津屋崎）
三位　真武弘之（中央）
田代大三（中央）
二年生の部
一位　広渡三善（福間）
二位　遠藤健一（大島）
三位　魚住大樹（玄海）
花田千代治（玄海）
三年生の部
一位　川端清貴（福間）
二位　広渡浩三（福間）
三位　遠藤剛一（大島）

尚、念の為、別紙警告確認書写しを呈出致します。

〈写真〉

雅楽練習会
秋山孝行氏を迎えて

宗像放生会をまじかに控えた九月十日より一週間恒例の雅楽練習会を行なった。

例年通り東京乃木雅楽会楽長、秋山孝行氏を講師として連日の特訓、今年は特に篳篥を中心に練習が行なわれ、平調、越殿楽、五章楽急、皇じょう急、三ノ塩急、陪臚、雅楽、雙調、酒胡子、陵王等の曲を学んだ。

大会では新たに笛一管、篳篥二管、龍笛一管、篳篥二管を講入、益々盛んになってきた雅楽は、春秋大祭を始め、風俗舞、浦安舞の神賑奉納舞に奏楽、特に大祭献饌、撤饌にも三管だて奏楽する様になっては今年、宗像放生日々厳粛に斎行される。

× ×

ロンドン大相撲

われら学生団の最後の訪問地ロンドンに向う英仏海峡の船中、三月下旬の日曜でもあって一般乗客も少くない。学生たちはサロンに三々伍々、今度は英語が大ぴらに飛び通る国、早くも英人らしい相手と話している学生もいる。英語も駄目の半句先生は、片隅の席でコーヒーをすゝりながら独り海峡を眺める。

ロンドン名物の霧がドーバーを隠して視界は狭い。気象上の正確な名は霧（モヤ）であるが、霧と呼ぶ。そんな名などはどうでもよいが、暗い感じは嫌である。事実、英仏両民族の争闘を主とする暗い歴史がある。どの国でも英雄とか愛国者とかが、史上に輝やかしい名誉を残した事蹟には、民族の危機と犠牲が彩られていた。平和を願いながら流血の惨事を繰り返す、それが人類の宿命かも知れない。吾、生きとし生ける物すべてが、免れられない天理であろうか。

過去の記憶の中から、半句先生は数年前福岡で聞いたS翁の茶飲み話を語り出した。強いて表題をつけると、ロンドン大相撲。

今は鬼籍に入ったS翁を旅先に訪ねた頃は既に八十に歳だったが、いつもその健啖ぶりに驚いたもの。朝食をすました直後に、訪問者が待参した焼餅を四五個ぺろげて、ロンドン旅行が飛び出す。

S翁はある商社の役員の肩書を持っていた頃、取引先の英国商社のロンドン本社に出向を依頼された。古武士風の明治型が英人社長と直接談判だから、適任でないとの判断。

帰国して簡単に要求通りの取引結果を会社に報告したら、皆がなかなかの商売上手と感服して、男をあげたものだ。相撲は内密にしていたが、やがて向うからバレて、無茶苦茶な商法だと大笑。

昭和も五十年になりかけた。明治は遠くなりにけりの感懐も当然なのだが、明治型も追々と消えてゆく鉄マンは知らぬが、日本鉄道は

外遊雑話
猫も杓子も
(18)

なく、発車のベルも鳴らない。やがて何の合図もなく荷物列車同様に駅を離れた。

日本の鉄道は時間の正確さは世界一。比較的几帳面な英国がこの調子だから、欧米各国の運行事情は推して知るべし。この頃の国鉄マンは知らぬが、日本鉄道は一種特有の風格があった。まじめさ堅さが鉄道の本領で、それは明治以後も残存する武士道でもあった。よいものは失いたくない。

時折停車しホームで駅員の姿も見えず、発着に合図なく、売店など全くなかった。車窓に現れる高原や雑木林には、どこも自動車が停めてあり、日曜のレジャーを楽しむ風景はこの国も同じである。ロンドンに着くと荷物を取ってバスに乗る。ホテルは繁華街の辻で、先着の日本人旅行団の姿も多かった。

乗りものの言えば、かって人力車を発明した日本、自慢に海外へ輸出したそうである。殊にお隣の中国では、自動車出現以前の花形として人気があったそうである。

近来の自動車ブームで、人力車は本家の日本でも影を没したが、最近露路裏の狭い道も通れるし費用も安いとかで、銀座裏の花街で復活、専ら芸者をお座敷通いに国産発明品の面目を残しているとか。

わが国の発明ではないが、戦後の輸出企業に最も高い地位を築いたのが自動車産業で、世界一自慢の米国を凌ぐ数字を示している。商売上の利害や始みあって、日本製品の進出はバッ悪しい評も少くない。エコノミック・アニマルと排斥される原因は、輸出品ばかりでない。思い上った旅行者の成金根性も、各国でいやらしく思った。日本人よ、ウヌボレは輸出するな。

（風来子）

神湊
こうのみなと
(62)

楠早鳥作
福田長画庵

幕府（その二）

鴨眠の女人を乗せた輿は、その夜都大路を通り堀川の大内邸へ入った。この時は、京童の口から口へと伝わり翌日は大騒な話となった。

それを家人から聞いた明継は巳刻、頃はよしと邸をでて幕府へ向った。かって弘世が上洛の折、莫大な贈物を幕府の上に行って以来、この四国一の覇者はただでさえ人の口の端に上り易い上に、この度は、こと更に人目をひく異人の入来である。

同じ刻、幕府では管領斯波義将は侍臣法師岡斎と会っていた。

「明継という男、えらい道具だて上ってきたものじゃ朝から彼奴の伴ってきた女人の話でもちきりでな、一体上洛の目的は何だと思う」

軍前越に膝まずいた岡斎は面を伏せて、先日来からの明継の行動を述べ、考えられまことは多分、幕府の守護大名に対する政策、なかんずく対明、対鮮交易の方針を探ることにありましょう」と答えた。

当時、幕府は北小路室町にあった、もと院の御所があった所を、義満が賜ったもので、さらに公家の菊亭家の跡も加えた広大な敷地を擁していた。義満はここに営茂川から水をひいて一町あまりの池を造り中門、寝殿、東の廊、常御所、透渡殿、釣殿などを建て、庭には四季おりおりの花木を植え、公家や諸大名から名木珍樹を献上させた。それはまことに「花亭」「花の御所」とよばれるにふさわしい絢爛たる造作で、武家の棟梁というよりは、公家や文人に近い義満、義政といった文化将軍に象徴される室町幕府の幕あけを飾るにふさわしい柳営であった。しかし三代将軍義満がここまできりけたことは決して生易しいことではなかった。祖父尊氏のときもそうであったが、父の義詮のときも幕府の内部は分裂し、南朝方の攻撃によりわずか四才の義満は幡磨、国守護赤松則祐の白旗城にかくまわれたこともあった。父義詮の死により応永元年十一歳で征夷大将軍の宣下をうけた義満の前途は、まさにいばらの道であった。南朝勢力の執拗な反攻、南北朝合体運動の停滞や、信頼する管領細川頼之と土岐頼康、山名師義、斯波義将ら有力大名との対立、関東公方足利氏満の将軍職への野望と反幕的策謀等、幕府の命とりになる難問が山積していた。こうした苦難と試練にたえぬき、鞘もはたちをこえた義満の胸の中にはやっと公家をおさえ、武家政権を確立する自信がわいてきた。

室町第の完成は、それまでゆれにゆれてきた幕府政治を不動のものとし、体制づくり最後の仕上げであるいは将軍専制時代のはじまりを意味していた。

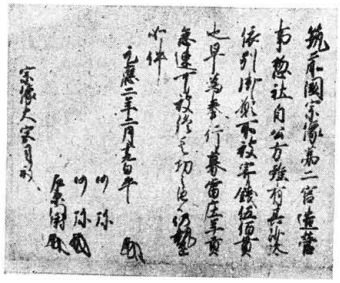
義満が永和四年室町第に移りのちに北山第すなわち金閣に移るまでの二十年間の生活は、一口にいって公家化、あるいは公武一体化を通じての専政権力確立の時代といえよう。将軍の位にありながら参議から権大納言へ、さらには左大臣、蔵人所別当、源氏長者、奨学院、淳和院別当、准三宮、そして応永二年には、三十八才でついに太政大臣を任ぜられ、まさに位人臣をきわめたのであった。

しかし義満がいかに公家化したところで彼の本質は武家の棟梁であり権力の本質は軍事力にあることは変りがなかった。足利将軍、室町幕府を事実的に支えたもっとも重要な基盤はなんと言っても在京有力守護大名たちの軍事力であった。室町時代の守護大名は、関東公方管轄下の東国十カ国に陸奥、出羽、九州探題管轄下の九州などの十一カ国の守護を除く二十一守護が、室町御分国とか、公方分国とよばれた四十五カ国を管理していた。かれらは「二十一屋形」と称され、京都の室町第・北小路第など将軍御所のまわりに館をかまえ、常時将軍の護衛に任じていた。このため本領や管国の支配は守護代や家臣に任せきりの状態であった。幕府はかれらによって構成されていた。「三管四職」とよばれるのがこれである。当時の幕府にとって西国は不気味な存在であった。九州で確固たる基盤を築きつつある探題今川了俊、京都の繁栄に抗抗するかのように山口の充実を急ぐ大内家、かれらはこの対策に腐心していた。

☆　☆　☆

郷土の文化財展開催

―新発見の文化財も多数―



秋季大祭には、当社宝物館の一環行事として、宗像郡内の文化財再発見を目的に、毎年十月一日より十日まで十日間、郷土展を行なってきている。

本年は「郷土の文化財展」と銘うって開催し、多数の見学者を集め盛況裡に閉会した。

先年の「社宝展」・「寺宝展」に引き続き、多数の出品物が集まり、まだまだ秘蔵されている文化財の多いことが再確認された。

中でも、新たに当社に奉納された、北条時政による大宮司職裁許状をはじめとする「宗像文書」（鎌倉時代）一巻。旧八並村（福間町）に伝わる、黒田長政による「慶長検地帳」は出色であった。

慶長検地帳は、当宗像郡で現存する唯一のもので、県内でも「糸島郡」「早良村」をはじめ二、三例しか確認されておらず、黒田藩制初期の経済を研究するに欠かせない文献である。いづれ県指定の文化財となることと思われる。

主なる出品物は

宗像文書一巻（重要文化財）
慶長検地帳他三点
玄海町スイラ古墳出土品一括
中国・日本の古銭、紙幣数十点
珠光青磁碗一点　他

今回も御協賛いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

写真は、宗像文書の一部

スイラ一七一号古墳調査す

玄海町牟田尻所在

玄海町教育委員会では、八月二十日より九月十日まで、神湊区上水道工事に先立ち、スイラ古墳の調査を行なった。

スイラ古墳群は、宗像郡玄海町牟田尻の裏山の尾根上に点在し、桜京古墳群の一支流を形成すると推定される。

今回調査されたスイラ一七一号墳は、北に玄界灘、東に釣川を見下す山頂に構築された、直径十五メートル、高さ二メートル程の小円墳で三十基からなるスイラ古墳群の一画をしめている。

墳丘の南側は著じるしく変形しているが、墳丘裾部に土器を埋設している。これは、埴輪列にかわるものである。

石室は、巾一メートル、長さ二・五メートル、高さ二メートルを測りコンパクトにまとめられた横穴式石室である。砂岩質の石材を用いて構築された石室は、素雑な積み形をしており、天井は同質の角状石六枚により葺いている。石質の大半は地山中に埋め込まれ、半地下式傾向を示めす。

石室入口の羨門部には、敷居石をおき、その上に大きな角礫を粘土でもって積み上げ閉塞装置としている。

石室内床面は、川原石を二、三重に敷きつめている。

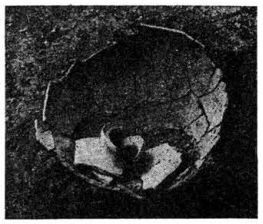
調査の結果、ざんねんなことには、南側側壁、天井下に六～七十センチ四方に側壁の石を取りさり、盗掘されていたことである。これにより石室内に埋納されていたのであろう副葬品の全てが消失されていた。

墳丘裾部に埋設されていた、土師器、須恵器形式から築造年代は六世紀前半代に比定できる。

出土造物は次の通りである。

土師器　高杯二個、碗一個
須恵器　高杯一個、はそう一個
甕二個、壷一個

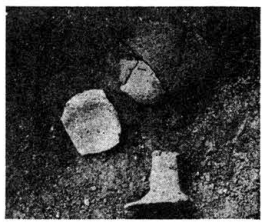
①



③

尚詳細は、後日発刊の調査報告書を参照せられたい。

写真は上から



②

① 石室入口羨道部
② トレンチ内須恵器出土状況
③ 拡張区土師器高杯出土状況

話題の新車をみる（二〇）

フェアレディZシリーズ車（五十一年規制クリア）の巻

日産自動車は去る七月三十日、プレジデントおよびフェアレディZの五十一年排気ガス対策車を発表、同日より発売を開始した。

これにより日産乗用車のすべてが五十一年対策を了わったことになるが、今回はその中のフェアレディZシリーズについて見てみよう。

今回発売のフェアレディZには、特別注文仕様のZ－Tが新たに登場したことにより、2BY2（四人乗り）と2シーター（2人乗り）の基本シェルに、それぞれZ－T、Z－L、Zの三車種－計六車種が用意され、運軽タイプ別には一〇タイプシリーズがそろった。

現在、2シーターと4座の2／2とが併行生産されて、月産は八〇〇台。世界でも類のない大量生産型の純正スポーツカー。最高級モデルのZ－L2／2でも基本価格は一七余万円にすぎず、これだけの値段でフェアレディ程の高性能車が買える国々は他には見あたらない。

ちなみに、新設「Z－T」は、これまでの「Z－L」をベースに操縦性と安全性を高めた。一九五七DHR－一四チューブレス・ラジアルタイヤやアルミホイールを採用。更にパワーウインドウや電動式リモコンミラー、FM／AMマルチラジオ付カセットステレオ等装備を充たしたモデルである。

扨て、従来の五十年対策車に比べて、大きな変更点はないが－室内で①シートの柄が縦パターンから横パターンに変わり、表皮材質が平織りから起毛平織りに変わったこと②カーステレオがカートリッジからカセット型になったこと③フロア・コンソールにアームレスト兼用の蓋が付き、灰皿の容積が大きくなっており、灰皿は照明付き。④半ドア警告灯・ライト消し忘れ警告灯・パーキングランプスイッチ等が新設若しくは操作方法や位置が変更されたほか、スピードメーターが従前の二四〇キロ／hより一八〇キロ／hまでの表示になっている。

次に、エンジンはL二〇型EGI付き、七八×六九・七mm、六気筒OHC、一九九八CC、圧縮比八・六で一三〇PS／六〇〇〇rpm、一七Kgm／四四〇〇rpmの最高出力および最大トルク性能をもつも、これは「セドリック」を始め、「スカイライン」「ブルーバード」「ローレル」まで広範囲に装備されているもの。表示性能やデーターは五十年対策車と全く同じと云ってよいが、四八年対策当時のツインSU気化器仕様よりも五十一年対策の方が、最高出力も上、使いやすさも上、燃費もむしろ低減され賞讃に価する－六〇キロm／h定地は一五キロm／ℓ。

その他、ブレーキは2シーターの七・五インチより大きな9インチのマスターバック付きで、踏力は軽く安定した効き味を示し、前輪ディスク、後輪アルフィン・ドラムL&Tの組合せで倍力装置付等が装備され一層の充実をみせている。

社務日誌抄

九月四日
洋仔宗像会三十名参拝、
筑前神職会総会出席、於糸島

九月六日
雅楽講習（十一日まで）

九月八日
嘉穂郡厳島神社総代参拝、
福岡県観光連盟八名参拝、
総代奉仕（山林クロ切り）

九月十一日
出光興産千葉製油所副所長前田市成氏参拝、

九月十二日
氏子総代会、於清明殿

九月十五日
月次祭、

九月十六日
四者会談、於会議室

九月十七日
沖津宮御神輿奉遷、
出光興産麻生店主室長来社、
㈱MF十二名安全祈願祭

九月十八日
菱化海運船主会二十四名参拝

九月十九日
沖津宮参道修復工事着工、
菊花会役員会、於斎館、
広島市鳥井運輸社長外二十六名参拝

九月二十日
風俗舞、浦安舞、温習

九月二十一日
宗像郡交通安全協会参拝、
宮地嶽神社秋季大祭参列

九月二十二日
琉球神道龍泉一行九名参拝、
玄海町青年団々旗入魂式

九月二十三日
皇霊殿遥拝式、
祖霊社祭

九月二十四日
玄海町戦没者慰霊祭、
出光興産福岡支店研修会、
出光興産千葉製油所々長森久氏外一名参拝、
玄海町消防団秋季大祭打合せ会、於会議室、
記者クラブ打合せ会

九月二十五日
太宰府天満宮例祭、参列
門司鉄道管理局運転部長外二百名参拝、
静岡清泉町宗像神社総代参拝
出光福岡支店販売課参拝

九月二十六日
諏訪神社例祭参列

九月二十七日
養父祢宜、神道友好協会主催の神道書籍贈呈の為渡米、
遠賀宗像会六十名参拝

九月二十八日
長田神社宮司参拝、
英彦山神宮大祭参列、
郡中学補導協議会、於斎館、
総代奉仕

九月三十日
秋季大祭宵宮祭、
高宮地主祭、辺津宮出御祭、
みなと祭、頓宮祭

十月一日
秋季大祭第一日祭、
中津宮出御祭、海上神幸、頓宮祭

十月二日
秋季大祭第二日祭、
流鏑馬神事、第二宮、第三宮祭、摂末社祭

十月三日
秋季大祭第三日祭、
護国神社祭、
献茶祭

瀛津嶋防人日記（9）

(44)神の世にさかきにとりし楢の葉のかたしはとさへなるかあやしさ

神の世に神域の境界の木として植ゑた、楢の木の葉が堅い柴、つまり化石とさえなっているのはふしぎである。

「さかき」は、常緑樹の総称であるが、特に神事に用いる木をさす場合が多い。昔は神域の境に植えたのでこの名があるという。楢は落葉樹であるが、やはり神域に植ゑられたのであろう。「かたしは」は「かたしば」とよむべきであろう。つまり化石した状態をいうのである。「あやしさ」は、ここではふしぎさととるべきである。日記によれば、宗像神社の東北の村からこの化石が出て、宗像氏の家紋の三つ柏に似ているところから神紋石と呼ばれていたという。作者はそこにいっそう心をひかれたのであろう。(43)から(48)までの六首は田島での作であるが、どれもみな皇朝学者らしい歌ばかりである。彼はまた九州での考古学の始祖でもあったから、化石などにも特別の興味をもっていたと想像してよかろう。

(45)吾も見つ人にも告げん宗像の皇御神（すめらみかみ）のふみしあとところ

自分も見た。人人にも知らせよう。宗像の皇神のふんだ足跡のある所を。

「あとところ」は、足跡、遺跡などの意。万葉（巻七・一二六七）に類句がある。この歌は山部赤人が、千葉県市川市にある、おとめ手児名（てこな）の悲恋を悲しんだ長歌の反歌に、「我も見つ人にも告げむ葛飾（かつしか）の真間の手児名のおくつき処」（巻三・四三二）の横倣であることは誰れでも気のつくところであろう。(39)と同じ本歌取りの歌といえるのである。ただ赤人の歌は悲歌（エレジー）であり、これは神の降臨をことほぐ歌であるところが、(39)の歌の場合とは違うのである。以下の四首も万葉を意識しながらの作と思われるが、それが単なる模倣に終っていないで、感銘のあるのはやはり根本に敬神の思想がみなぎっていたからであろう。以下の四首は大島に引き返して、宗像の神の始めてお着きになったという神崎にての作である。

(46)後の世にいひつくかねと皇神の此のあとところしかしけらしも

後の世までも言い継いでほしいと、すめ神はこのあとところを世に広く示されたのであろう。

「いひつくかね」は「いひつぐがね」で、言いついでほしいとの意。「しかしけらしも」は、敷いて置かれたものらしい。世に広く示されたらしい。この歌も、山上憶良の筑前深江での長歌の「後の世に言ひ継ぐがねと」（巻五・八一三）や、その反歌の「天地に共に久しく言ひ継げとこのくしみ魂（たま）しかしけらしも」（巻五・八一四）などの歌を意識しての作であろう。

(47)岩の上を土と踏なし万代に神さひいますこれのあとゝころ

岩の上を大地のように踏んで、神々しくいます。このあと処は。

「岩の上を」は、大島の神崎は岩崎ともいって岩の群がっているところであろうから、そこの岩の上を、ということである。「土」は大地、地面などをさす。「神さひ」は「神さび」で、ここは神々しい意。日記には、風土記の崎門山（さきとやま）はこの神崎のことであろうかといっている。風土記筑前国の「宗像郡（存疑）」のところに、西海道の風土記に日はく、宗像の大神、天より降りまして、崎門山に居ましし時、青庭（あをに）の玉を以ちて奥津宮の表（しるし）に置き、八尺庭（やさかに）の紫玉を以ちて中津宮の表に置き、八咫（やた）の鏡を以ちて辺津宮の表に置き、此の三つの表を以ちて神のみ體（み）の形と成して、三つの宮に納め置きたまひて、即（やが）て隠りましき。因りて身形（みのかた）の郡ここおり）と曰（い）ひき。後の人、改めて宗像と曰ふ。其の大海命（おおあまのみこと）の子孫は、今の宗像朝臣（むなかたあそみ）等、是なり。云々」とある。しかし宗像郡の下に（存疑）とあるところを見ると、この伝説には疑いがあるというのである。それは、西海道風土記の名はこのところだけにあるから古代の風土記の記事かどうかは疑わしい、風土記とはおそらくちがった種類の古記録にあったものであろうというのである。種信は風土記の記事という右のことをいちおう信じてこの四首の歌を作ったものと見える。この神宝は三つとも(21)の歌の所と一致する。

(48)あらいそのゆつ岩村に残るあと今のうつゝに見るかあやしさ

荒磯のたくさんの岩の群がっているところに残っている神の遺跡を今の現実に見るのは霊妙である。

「ゆつ岩村」は「五百箇岩群」で、(24)のところにもあったように、万葉の類句である。「あやしさは、ふしぎ」などの意があるが、ここの場合は霊妙と訳した方がふさわしいような気がする。つまり尊くふしぎなこと。

九州大谷短期大学教授
中村行利

宗像大社歌会
俳句作品集（二六五）

福間　広渡一寸毛
法華経の読経も長し秋の月

宗像　吉田　和子
節高き農婦の手ふり桃を画く

福岡　吉村　三郎
秋祭舳に被う沖の島

宗像　安部　ゆき
朝戸繰る新涼俄か物かなし

土穴　八尋　恒夫
放生会柿や栗有る露天店

宗像　力丸　一郎
法師蝉弱りて初秋柿の色

玄海　吉武　武雄
夜も更けて妻の寝息や虫すだく

藤沢　玄洋子
秋晴れや潮路の果ての沖津島

宗像　岡田　無名
秋晴れの渚に子等は波をおう

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦
―出光佐三の事業理念―

第八章　驚異の製油所

白紙に描く

当初、西地区は徳山市が商業港湾地帯として払い下げを希望した。出光はその接収解除に当たってあっせんの労をとったが、途中から昭和石油が製油所建設の計画をひっさげて割り込んだ。出光もあわてて、製油所建設第一期計画を提出したが、政府は二十八年九月に昭和石油への払い下げを決定してしまった。いわば、トンビにあぶらあげをさらわれた形である。

東地区では周到な準備を進めた。西地区が昭和石油に決まった直後、接収解除を仮定した場合の製油所建設計画を提出、土地、建て物の払い下げを申請した。

ここでも昭和石油との競願になったが、三十年八月の閣議で石橋湛山通産相が提出した原案どおり、出光への払い下げが決まった。

決定までには、ひとつのエピソードがある。

イラン石油輸入で、出光がいちはやく国際舞台に躍り出た二十八年、佐三は財界の長老松永安左エ門氏（故人）を囲む会合に招かれ、輸入問題でいろいろ打ち割った話をした。

そのとき、当時野にあった石橋湛山も出席していたが、佐三がわが国の石油政策のあり方にふれ『日本がイランの石油資源と結ばれれば、一出光のことなど考える必要はない。十数億円の日章丸（二世）だって安いものだ』といった持論をぶつと、石橋は『ほう、君はそういう考えで仕事をしているのか』と感銘を受けたようすだった。

たまたま払い下げ問題が大詰めにきたとき、石橋は通産相をしており、出光に好意的な処置をとった、というのである。

佐三は『一生懸命やっておれば、こういうふうになっていく。（国際石油カルテルが）船を出光から取りあげたところが日章丸（二世）ができた。日章丸ができたからイランの石油を輸入し、イラン問題のとき出光のやり方にたいして石橋さんが感激して、徳山の製油所が出光にきた』と語っている。

払い下げによって出光は、既払い下げ分と徳山市有地の買収分を加え、合計約十六万二千余坪（約五十三万五千平方メートル）を所有することになった。

用地は確保できた。絵を画くためのキャンバス（画布）は手に入ったのである。

つぎに必要なものは、資金と技術であった。

しかし、ともに国内では調達できず、米国から導入することになった。

まず資金だが、佐三は『日銀行で玄関払いをくわされた』と語っている。政府が徳山を出光に払い下げる方針を決めた三十年春は、金融ひっぱく期でもあった。それに、金融界における出光の評価はまだ不安定であり、絶対に信頼できる優良貸し出し先とはいえなかった。

設備資金については、専門的金融機関である興業銀行が融資をしぶれば、まず国内での借り入れは絶望的である。

ところが、アメリカ銀行（バンク・オブ・アメリカ）は出光の一千万ドル（三十六億円）の融資申し入れを、ただちに承諾した。アメリカ銀行といえば、世界最大の銀行である。ここが融資するとなれば、国内の銀行は完全に右へならえである。当初予定した建設資金七十億円余りの手当ては、あっという間にメドがついた。

アメリカ銀行は一九〇四年、サンフランシスコの一隅でイタリア系米国人A・P・ジァニーニによって創設された。『庶民のための銀行』をモットーとし、支店銀行組織を拡充し、産業の発展をリードする積極的営業政策をとった。ジァニーニは、同行がニューヨークのチェース・ナショナル銀行を抜いて世界最大となった。一九四五年、会長を退いて一代かぎりの『創立者会長』となったが、銀行業は『正義と主義のための戦い』であるとし『金持ちでないこと』を、自らの最大の誇りとしたという。

同行の主義、営業方針は、出光の理念、方針と似通ったところが多い。

出光は二十七年、日章丸（二世）を駆って米国から石油を輸入したときから、アメリカ銀行との取り引きを始めている。いらい同行も、出光の経営方針、内容を十分に調査、分析していた。

出光の融資申し入れにたいし『資本金にたいしてではない、合理的経営法にたいして貸すのだ』といい、さらに『出光と取り引きするのは、うちの銀行の名誉だ』とまで、積極的な姿勢をみせた。

つぎに、技術である。

これは、最初から国内では無理であった。米国にくらべ、いちじるしく立ち遅れているうえに、出光には製油関係の技術者といえるものは、大和勝技師（現在、副社長）を含めたった三人しかいなかった。

そこで、徳山の払い下げが閣議決定すると同時に石田正実常務と大和技師を米国に派遣、約三カ月にわたって各地の製油所を調査、研究させた。

この結果、シカゴのUOP（ユニバーサル・オイル・プロダクツ、日本での総代理店は日本揮発油）から技術導入、一括設計依頼の方針が固まった。

こうした準備を整えたうえで、佐三は三十年十月に初めて渡米、約四十日間にわたって各地を視察するとともに、アメリカ銀行から一千万ドル借款、UOPからの技術導入契約に仮調印、さらにガルフ石油との原油輸入商談を進めている。

資金と技術の導入は、ともに翌年一月の外資審議会で認可が決った。

神の祭りと十カ月完成

徳山製油所建設のお膳立ては整った。

建設に当って、何を目標とし、どうそれを実現するか。

世界最新鋭、最大規模の製油所、というのは当然のことである。あえて、目標として掲げるまでもない。

出光が立てた目標は、つぎのようであった。

第一に、工期十カ月で完成すること。

佐三は三十二年五月、竣工式でのあいさつでつぎのように述べている。

『今回、徳山の製油所を建設するにあたりまして、私どもがおたがいに話し合ったことは徳山製油所建設そのものを目的とするのではない。製油所は、金と時日をかければだれにでもできる。われわれがめざすのは、真に人間が働いて、そして一致協力して団結したならば、徳山製油所というものを簡単に早く作りあげるはずである。そういうわけで、いろいろ計算いたしましたところが、十カ月という数字が出ましたので、一致団結して十カ月でやりあげるということが、徳山製油所の真の目的、目標であったのであります』

『人間が真に働く力を顕現し、国家社会に示唆を与える』というのは、出光にとって事業の目的であり、精神的定款でもある。創業いらい出光は『人間尊重』の理念のもとに、一途にこの目的を追求してきた。

しかし、こんどの製油所建設は出光だけではない。日本人だけでもない。日本人と米国人との、国境と人種を越えた協力がなければ、とうてい不可能なのである。

佐三はUOPとの契約のとき、こう提案していた。

『出光はこれまで、真に働く人間の力を結集して成功してきた。徳山の工場は日本人だけではなく、米国人と日本人が力を合わせてりっぱなものを作りたい。ご協力をお願いする』

第二は、市民とともに楽しむ工場とすること。

海軍燃料廠は、軍の機密工場だった。市民からは隔絶され、山陽本線を走る列車はブラインドをおろされた。

緑豊かな徳山製油所

しかし、列車の乗客にとって、沿線の眺めは楽しいものでなければならない。市民にとって広大な臨海部を占拠する製油所は、海辺にかわるいこいの場でなければならない。もちろん、公害源となることは絶対に避けなければならない。

佐三は、このこともUOPに注文した。

相手も大いに乗り気である。『われわれもそんな工場を作りたいのだが、米国ではなかなかむずかしい。ぜひやらせてくれ』という。

出光が立てた目標『十カ月完成』には、最初多くの業者が疑問を抱いた。

日本はもちろん米国でも、これだけの工事を十カ月完成という短期間で完成した例はない。UOPのポッター技師長でさえ、のちに『米国でも二年、英国ならおそらく三年かかるだろう』と述懐している。協力は約束したものの、設計段階では半信半疑だったに違いない。

しかし、実際に工事にかかってみて、出光の社員たちの働きぶりに目を見張った。

昼も夜もないのである。施主みずからが、先頭に立って働いた。出光にとって画期的な大事業だから、当然といえば当然だが、そのひたむきの姿、あふれるような情熱が業者、作業員たちの心を打った。

若い技術社員たちの活躍はめざましかった。研究と討議が続き、新しい試みがどしどし採用された。日ごとに成長し、たくましくなった。

出光の注文した機械の納期はきびしかった。しかし業者たちは、指定日に納入された機械がすぐ建設工事に組み込まれることを知った。

各業者、作業員たちの間にありがちな反目、妙な競争意識は消えた。出光を中心に各業者、作業員たちが融け合い、一丸となって働くようになった。

工期の半ばごろには、この姿がすっかり定着した。追い込みに入った三十二年正月には、作業員たちが自ら休みを返上した。

『人間の真に働く力』が発揮され始めた。

UOPのポッター技師長らは、何かことが起きると真夜中でも現場に走った。

当時、若手社員として建設工事にたずさわった赤塚寿氏（現在、兵庫製油所副所長）は『それは、生れて初めての凄絶な経験であった』と語り、つぎのようなエピソードを紹介している。

突貫工事が続く三十一年暮れのころだった。基礎工事ができあがったのに、上に据える塔槽類やパイプなどの配管材料が到着しない。

完成の予定期日は迫る。思いあまって、本社の大和勝取締役に『資材が早く到着するよう取りはからっていただきたい』とテレタイプを打った。

五分もしないうちに、直接電話がかかってきた。

『何をいっとるか。材料がなくても期日までに完成しろ』

それだけであった。

赤塚氏はいう。

『脳天をガンと一カツされたような気がした。ハッと心にひらめくものがあった。〝物がなくても作る。この気持だ、この精神だ。よし、やるぞ〟と覚悟を決めた』

みんなで手分けして、メーカーに行き督促した。現地で作れるものは作った。

こうして工事は、ふたたび軌道に乗り、予定より一週間早く完成した。

製油所建設にかける情熱は、米国にも飛び火した。

工期中、米国で鉄鋼ストがあった。UOPから『納期が十五日遅れる』と連絡してきた。

佐三は折り返し、同社のベネバー社長に電報を打った。

『出光はこれまでウソを言ったことがない。納期が延びればそれだけ完成が遅れる。出光はウソを言ったことになる』

UOPは各メーカーの尻をたたき、逆に納期を十五日早めてくれた。

ところが、この機器の積み出しのとき、こんどはニューヨークの港湾ストが起こった。サンフランシスコまで陸送し、改めて船積みしたが運送に当たったハーパー・ロビンソンの協力ぶりはめざましく、ここでも予定日を繰りあげることができた。

こうして、徳山製油所は完成した。工期は予定どおり十カ月であった。

三十二年三月十七日、火入れ式を行なった。

前夜までの雨はあがり、からりと晴れあがった上天気だった。点火器がポッター技師長から佐三に渡され、蒸溜釜に火が入れられた。

出光が持った最初の製油所、国際カルテルに支配されない世界最新鋭、最大規模の製油所がいま力強い鼓動を始めたのである。

佐三の顔は輝き、建設に従事した社員、作業員たちから、いっせいに拍手の嵐がわき起った。

（つづく）

児童の遊戯・玩具

十月十日体育の日は、昭和三十九年のこの日、東京オリンピックの開会式が行なわれたのを記念して制定されたものである。

十七日は伊勢神宮に豊穣の祈を捧げる祭祀（新嘗祭）があり、二十二日は、全国的に有名な京都平安神宮の時代祭りが行われる、又全国各地に於いて氏神様の秋の例大祭が盛大に行われ、スポーツ・行楽に最的な季節である。

手鞠（てまり）

鞠を手でつく遊戯。後深草天皇の建長四年（一二五二）の「弁内侍日記」に、「みな御所へ参りあひ、殿より楓の枝に手鞠を付けて参らせたまひたる」と見えているが、これは蹴鞠（しゅうきく）の儀式がくずれて、手鞠を楓の枝につけた風流のことを記したもののようである。蹴鞠（けまり）の文献は、皇極天皇のとき（六四五）に、中大兄皇子と中臣鎌足とで遊ばれたとみえるほど古く、やがて手で遊鞠ぶの工夫から、お手玉の風に用いられたようで、手鞠をつく遊びが盛んになったのは、室町時代の永享ごろ（一四三〇）で、そのころから江戸時代にかけての手鞠の発達は、鞠も単なる糸巻から、芯に蛤殻もしくは砂などを入れて音を発せしめ、鋸屑を包んで反跳力を出させるなどして、手鞠遊びは全く現代風の手鞠唄で数えて行われる遊戯となり、鞠の特殊のかん手鞠、真綿製の五彩鞠の流行を経て、明治十八年（一八八五）ごろからゴム毬の輸入となり、現在の手鞠はこれを用いている。

お手玉（おてだま）

方二寸ぐらいの裂（きれ）の袋の中に小豆くずなどを入れ、数個を一組とした遊戯具。お手玉遊びの仕方は、お手玉遊びの数え唄をうたいながら、お手玉を投げたり、つかんだりするもので、古くは袋の中には小石を入れて用いたこともあり、鎌倉時代の初期に流行したものは「一二」（ひふ）と呼ばれた。文政十三年（一八三〇）の「嬉遊笑覧」には、そのころ、絹にて丸く袋に縫い。その内に鈴と赤小豆または銭などを入れて手玉としたと見えている。

綾取（あやとり）

児童遊戯の一種、五尺ほどの絲の端を結んで輪とし、これを左右の手首や指に巻いたり、引掛けたりして、綾にして一つの形をつくると、相手がやはり指でそれをとりながら、別の形にかえて手首に移しとる。こうして、交代に絲を綾にして遊ぶ。形には、小川・お舟・魚・鼓と移しとって、最後の箏は、鼓を崩したもので、もう移しとれない、それを引っぱって、「文福茶釜に毛がはえて屑屋に売ったら逃げられた」と謡う。

風船（ふうせん）

空中に飛ばす玩具。空気より軽い浮揚ガスを入れたガス嚢を備え、おもに静的浮力によって空中に浮かぶ、または上昇し得るもので、推進機関のない球型気球を、わが国では江戸時代の末から明治初年にかけて風船と呼んだ。寛政元年（一七八九）長崎の吉村迂斎筆、和蘭国献ずるところの軽気球図賛を「風船昇天の図」と呼び、これに似せたゴム風船は、慶応四年（一八六八）に中国人によって横浜で売り始められた。これとは別に、一八〇二年型イングランド気球を模して、紅白の雁皮紙で作ったものを紙風船といい、明治二十三年（一八九〇）の冬、スペンサーの風船乗興行の後、上野公園山下あたりで立売したのが初めてであった。

シャボン玉

石鹸の溶き水に無患子（むくろじ）の焼粉を混ぜてかきまわし、その溶液を細い葭や藁しべの先に浸して吹くと、幾十球の五彩の虹を吹きあげる。それをシャボン玉といって売り歩く。シャボン玉屋の始まったのは延宝五年（一六七七）ごろで、寛文十二年（一六七二）諸国商人ら長崎で輸入品購買の制が定められた景物として、オランダから舶載された石鹸の溶き水が新材料となり、「さアさア寄ったりみたり、評判の玉や、シャボン玉、吹けば五色の虹が出る」と呼び歩かれたものであった。